
住宅地物語

紗渚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

住宅地物語

【Nコード】

N1577P

【作者名】

紗渚

【あらすじ】

ほのぼのと、ひっそりと、見える日常、見えない日常

ご案内

【0号室】

この物語は

ある町の二丁目の住宅地

その中にある

一つのマンション

そこに住む人々の

ちよつとした生活

それを

ひっそり

ほのぼのと

書いていきます

【204号室】

ほのぼの家族

【401号室】

爽やかおねえさん

【105号室】

柔らか老夫婦

【303号室】

いじわるおばさん

【201号室】

学生おにいさん

【403号室】

仲良し姉妹

【300号室】

ワケアリおじさん

【102号室】

ツンデレ生徒会長

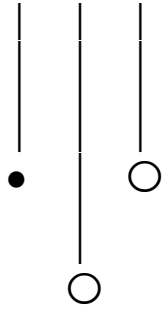
【101号室】

引っ越したての男子高校生

さて

何号室の住人の生活を

覗いてみますか？



登場人物随時更新…

【101号室】

「あー…疲れた…」

僕の名前は渋谷昇

憧れの1人暮らしをするために上京した15才

中学卒業と共に住み慣れた町を離れた

最初、両親はもちろん大反対だった

ただ、姉ちゃんだけは賛成してくれた

『別にいいんじゃないの？昇がそうしたいなら』

姉ちゃんとは七個も年が離れている

いつも僕の味方をしてくれていて、かつこよくて

最終的に両親は姉ちゃんが説得してくれた

駅での最後の瞬間

母さんの泣き顔

父さんの仏頂面

弟の笑い声

そして、

姉ちゃんの最後の言葉

『アンタがいきなり上京したいとか、理由なんてどうでもいい。』

『姉ちゃ…っ…っ』

『…行つてらっしやい』

姉ちゃんは俯いていた
顔は見えなかったけど、
多分、泣いていたのかな

電車に乗り込んで

最後に見たのは

姉ちゃんが笑顔で手を振っている姿だった

たぶん、姉ちゃんはわかっていたんだ
その、理由を…

【入居してきた15才】

「いい、だよな」

目の前には

五階建てのマンション

月6万となかなかの物件

名前は”グリーン”

(…緑?)

と、正面玄関のまえで首を傾げていると後ろから男の人の声がした

「渋谷くんかな？」

「へ？あ、はい…」

なんだろうと少し身構えると男の人はクスリと笑い

「私はこの管理人の田中ですよ」

「あ、し、渋谷昇です！」

僕は激しく頭を下げた

すると管理人さんはまたクスクスと笑いながら
おいで、と手招きして歩いていった
僕はおとなしくついていく、重い鞆を背負いなおして

管理人さんはどうやら50代半ばくらいみたいだ
まだ若々しく残っている白髪は綺麗に見えて
背中とは全く曲がってない
凜としているな…

ウチの父さんも50代だけど
全然ちがう

思い浮かべた父さんの顔
少し懐かしいな
なんて思ってしまった

まだ別れて6時間も経っていないのに

「ここだよ」

「101号室…」

管理人さんが扉をあけた
その中に顔を向けると

「う、わぁ…」

広い、とにかく
高校生（来週から）の僕にとっては
勿体ないくらいの広さ

大きな窓から溢れる光

どこに何をおこうか
ここで何をしようか

考えだしたら止まらない

「気に入ったかな？」

「はい、とても！」

「それじゃあ改めて……………」

……………グリーンにようこそ。渋谷くん

「…はい…！」

そんな訳で

渋谷昇の高校生活が始まる

つづく

(もしもし姉ちゃん？僕、がんばるよ！)

【102号室】その1

「今日もいい天気だなあ！」

やっぱり目覚めの太陽は気持ちいな！

僕、渋谷昇は

昨日無事にここグリーンへの引っ越しが完了した

まだ段ボールの中に荷物はあるけど
それも少しずつ片づけていこう

「あ！そういえば……」

ふと姉に荷物を渡されていたのを思い出した
来る前に口が酸っぱくなるほど
言われていたものだった

【い近所あいさつ】

それは旅立ちの前日…

『これ！持っていきなさい！』

『なに？これ』

『ご近所さんに配るお菓子よ、同じ階の人と、管理人さんと、あと…
…ていうか引越し先の人たち全員に配りなさい！お世話になるんだから！いいわね？はい、これっ！』

『ちよっ…重っ…』

もともと僕の荷物は少なかったからよかったけど
3つだったダンボールは
5つに増えていた

「ホントに全員にあげなきゃ…」

まずはとりあえず田中さんとかかな
僕は段ボールの中の箱を一つとりだす

（何が入ってるんだろ？…おかしとかかな？）

田中さんは

グリーンの前にある家に住んでいる

改めてみると

「・・・おつきいなあ・・・」

さっそく家のインターホンをならす
数秒で奥から足音が聞こえてきた

「はいはい、ん？ああ渋谷君」

「おはようございます」

「おはよう、どうしたんだい？」

紙袋から菓子箱を取り出す
僕がそれを渡そうとすると

田中さんはすぐキラキラさせた目をしていた

「これ…ご挨拶に、って姉が」

「うわぁ！ありがとう！僕、お菓子にめがなくてね…！」

「たぶんケーキだと思います」

「うれしいなあ！お姉さんによろしくね」

「あ、はい！」

頭をひとつぺコリとさげて
玄関を閉めると

中から楽しそうな鼻歌と
スキップのようなリズムの足音が聞こえた

「・・・ふふ」

うれしいなあ

そっか、姉ちゃんはこれが言いたかったのか

まだまだ沢山あるけど

みんなが田中さんみたいに

喜んでくれたら嬉しい…

僕は少し

お菓子を配るのが楽しくなってきた

「次は…やっぱお隣さんかな…」

僕の隣【102号室】

まだ僕はこの棟の誰とも会っていない

どんな人が住んでるのかな？

菓子の一と箱をもつて

隣室に向かった

——ピンポン…

「留守かな…？」

なかなか出てこないから
諦めようとした時だった

目の前の扉がガチャ、と
音をたてて開いた

「……だれ」

「…あ！ぼ、僕昨日、隣に越してきた渋谷っていいです！」

「…ああ、ども」

なんかそっけない人だなあ
大学生かな？

すっごい頭ぼさぼさ
でも男の僕がみてもわかる

この人はいわゆるイケメンってヤツだ

「あの、これつまらないものですが…」

「…ああ、ども」

この人さっきから同じことしか言っていない…

さっきの田中さんの
リアクションとの差がありすぎて
少ししょぼんとしてしまった

『昇、アンタはすぐ顔にでるから気をつけなさいよ』

あ！そうだ、ダメダメ
お隣さんの前でこんな顔しちゃ

「……………」

「あの！…えっとこれからよろしくおねがします！で、では！…」

「え、ちよっ…」

僕は無理やり笑って
逃げるようにその場から離れた

「……やっちゃった…」

絶対ひかれたよなあ…
少し落ち込みながらも
自分の部屋に戻る

「で、でも、まだ始まったばかりだし！」

そうやって自分を励まして
まだまだ沢山ある菓子箱を
いくつか手に取った

「頑張らなくちゃ」

|| || || || || || || || || ||

いつの間にか
お昼になっていた

沢山あった菓子箱は
結構減ったけど

留守の人が結構いたから
まだまだ残ってる

「保存効くかなあ、コレ…」

とりあえずお昼ご飯
今日はなんにもないから
コンビニでお弁当

「たまに食べるとおいしいんだよね」

もともとテレビを見つつ食べる

テレビからは
楽しそうな笑い声が聞こえるけど
なんだか僕は寂しかった

「なんか…静かだなあ…」

僕はお弁当を食べ終わると
眠くなり、そのまま
カーペットの上で寝てしまった

ふと窓を見ると

「えっ！？暗っ！」

時計の長い針は6
短い針は7をそれぞれさしていた

寝すぎたことに焦り
急いでお弁当の後片付けをした

明日は月曜日
ついに僕の新しい学校生活が始まる

「準備、昨日のうちにしといてよかった…」

さて、
洗濯に掃除をして
今日は早く寝よう
携帯をとりだして

姉ちゃんにメールをする

『今日も楽しかったよ。おやすみ』

数分も経たずに帰ってきた

『そう。よかったね^^おやすみなさい。明日も頑張っ
てね』

そのメールをみて

少し頬が緩んだ

明日も頑張ろうって

さっきより一層思えた

さあ、明日は何があるのかな？

つづく

（そういえばお隣さんってどんな人なのかな？）

【102号室】その2

今日から学校だ！

…と活きこんでいた僕だったけど
冷静に考えれば当たり前だった

「そつだよね…まだ春休みだよね…」

制服着る前でよかった…

【怒ってるの？】

制服を着る前だからといって
起きてしまった以上何をするか迷っていた

入学課題は終わったし…
何しようかな

「…うーん」

ーピンポーン…

「？、はい」

出てみると

そこには田中さんがいた

「どうかしたんですか？」

「はは、渋谷君のことだから今日、登校日だと思って早起きしちゃったろうなと思ってね」

「…う…はい」

見事に当たっていた
僕はそれに苦笑する

すると田中さんは
ニコニコと笑いながら

「そんな渋谷君に願いがあるんだ」

「お願い？」

「……………」

「……？」

田中さんのお願いというものは
ある人にある物を
届けてほしい
というものだった

目の前には

新学期から僕が通うはずの高校

(えっと…南野^{なんの}さん…だっけ?)

田中さんに頼まれたもの
それは今僕の腕の中にある

たぶん何かの資料かな?
大きな茶封筒

「勝手に入ってもいいのかな…?」

門の前で迷っていると
人影が見えた

あの人に聞こう!
南野さんは
ここの生徒なのかな?

「おい、なんか用か?」

「え、あ!あの!…っつて!」

話しかけようと思っていた人に

先に声をかけられた

…と思ったら

その先にいたのは
見たことのある人で

「
…お前」

「お、お隣さん!？」

こ、高校生だっただ…!!
ってそうじゃなくて!
なんでここにいるんだろう

「なんか、用か？」

「あ、えつと南野さんて人探してて…」

「南野？」

「知ってますか？」

「知ってるも何も、次期生徒会長だ…」

生徒会長!

てことは…2年生かな?

お隣さんは

僕を南野さんのところまで送ってくれるといって
校内に入れてくれた

「うわぁ…」

入学説明会の時に来たけど
やっぱりきれいだなぁ…

僕は余計に

高校生活が楽しみになった

「ここだ」

「あ、ありがとうございます！」

扉のプレートには

『生徒会室』

とかかれていた

でも

中に入ってみても

誰もいない

「あの…南野さんは…？」

「いる」

「いるって…でも…僕とあなたしかいな…って」

なにこの

マンガみたいな展開

僕はすぐ気が付いた

僕の前にいるこの人が

南野さんだって

「あなたが南野さんだんですか！？」

「…うるさい」

「だって！ここに案内してくれて…」

「嘘はついてねえ」

まあ…確かにそうだけど

南野さんは無表情で

僕のから資料を手を取った

まだ僕は動揺している

だつてそつでしょ!?

初めて会つた時とまるで印象が違つし…

あの時はこんなに

ぴつちりした恰好してなかつたし

「…つていつか生徒会長!？」

「だからうるせえつて…」

うわぁ…僕の隣の部屋の人が

先輩でしかも生徒会長だなんて!!

田中さんなんで教えてくれなかつたの!?

「田中さんに頼んだのは俺なんだよ」

「……へ？」

1人で悶絶してたら

南野さ…先輩に指摘された

先輩から？

なんでだろ

「なんでですか？」

「…へ、べつに…」

先輩はバツが悪そうに
頬を少し染めて
照れているようだった

どこに照れるようなことがあったのだろうか？

「お前ここの生徒になるって、田中さんに聞いて…」

んで、挨拶ん時…」

「挨拶のとき…っあ！！あの時はスイマセンでした！！……かってに
帰っちゃって…！！」

「そうじゃなくて！！」

「…へ？」

南野先輩が

初めて大きな声をだした

顔が真っ赤だ

言っておくけど

僕にはそういう趣味はないからね？

「俺にだってねえよ！！」

「うわっ！聞こえてたんですか！？」

「あたりまっ…ってそうじゃなくてよ…」

「はい…？」

「…だからっ…っな、名前…」

名前？

名前ならちゃんと言ったはずだけどなあ

渋谷ですって…聞こえなかったのかな

聞こえていなかったのならしょうがない

僕はもう一度

先輩にお辞儀をしてから

名乗った

「隣に越してきた渋谷です、よろしく願いしま…」

「だから違う…！…しっ下の名前だ下のッ…！」

「あ、え？…ああ！の…昇です」

「…そ、うか」

驚きながらも名乗ると

先輩は勢いが消え

ハッとして

すぐに落ち着いて

校門の前であつた

まさしく『生徒会長』の姿に戻つた

「よろしくな、昇。俺は南野恭輔^{なんのきょうすけ}。生徒会長だ」

そのたたずまいに

思わず見惚れてしまった

これが生徒会長…

なんかすっごいオーラだなあ…

「資料、ご苦労だったな助かった。」

「あ、いえいえ」

「…ありがとう。昇」

僕はもう一度
いえいえと腕を振り
部屋からでようとした

その時ふと思った

「先輩」

「ん？」

「もしかして名前だけのために僕を呼んだんですか？」

「…っ！！」

あ、先輩また赤くなつた
キリッとしたり慌てたり
面白いなあ…

「べっ…別にお前の名前聞きそびれて気になつたわけじゃねえから
な！！勘違いすんなよ！！」

「はいっ！ありがとうございます！」

ひとつ笑つて生徒会室をでた
怒ったり笑ったり

やっぱり面白いなあ

「仲良く…なれるといいなあ！」

|| || || || || || || || || || ||

春休みはあと1週間でおわる
緊張もしてるけど
でもやっぱりそれ以上に
ワクワクしてる

——ピンポーン

「ん？誰だろ」

時計の針は7を指している
もう外は暗い

こんな時間に誰だろうと
僕は玄関を目指した

「はい！…あ、南野先輩！」

「…よお」

そこには南野さんが
制服のまま立っていた

こんな時間まで
仕事してたのかな

しばらく無言で
お互い立っていた
すると先輩が

ずいっと箱を差し出してきた

「…これ？」

「…近所のうまいケーキ」

「うわぁ！いいんですか？」

僕は嬉しくて

先輩に頭をさげた

すると先輩は
また顔を真っ赤にして

「べっ…べっにお前の土産のお返しとかじゃなくて…！！…そっ……そ
うだ！気まぐれだ気まぐれ！！…かつ勘違いすんじゃないぞ！！…」

……じゃあな！」

先輩は一通り言い終わると
扉を強く締閉めた

「あつ！」

あれえ？

僕なんか怒らすようなこと
言っただけなあ……

「おやすみなさい！」

あわてて

すでに閉まっている扉に
向かって言った

すると

小さく

本当に小さく

「……おやすみ。昇」

と聞こえてきた

仲良くなれたかな？
なにはともあれ
新学期が楽しみだ！！

つづく

（怒ってるわけじゃないんだよね？）

【102号室】その2（後書き）

〓 次回予告 〓

町のスーパーでお買い物
その帰りだった

慣れない

1人暮らし生活だけど

自炊もなかなか

楽しいなあ…

ん？

「この棟、庭なんてあったんだ…」

つづく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1577p/>

住宅地物語

2011年11月14日10時04分発行